



誰もが生まれながらに持っている。公平にさずかっ
ていて、なくしたりしない。にもかかわらず、たいて
いは忘れ、気づかず、目もくれない。

空、大空である。雲が流れ、陽が射し、雨の落ちて
くるところ。生まれたときからあったし、死ぬときも
きつと頭上にひろがっているだろう。とてつもなく大
きく、とりわけ親しいはずなのに、とくに必要でもな
ければ見上げることもしない。

ひところまでは、そうではなかった。空は大切な情
報源だった。陽射しや雲のぐあい、お天気を読みと

をする。凶解したのを細長い棒で差して、まるですべ
てがわかつているような講釈する。いまや週間予報の
マークが天界模様を代理する。

しかし、たまには空と親しむのはいいことではある
まいか。なにしろ大きいだけでなく、色合い、かたち、
模様をたえず変化させる。明るくなったり暗くなつた
り、青白くなったり赤らんだり、黄色に染まったり、
火のように燃え立ったり……。壮大な天のライトアッ
プであつて、どんな観光イベントよりもすばらしい。
千変万化する舞台ながら、それをつくり出すのは、わ
ずかに空気と水蒸気と太陽の光だけ。つくづく自然の
造形力の偉大さを思わずにいられない。

空ならどこでも見られるというものだが、大空劇場
に入るためには、やはり入場券がある。空中散歩はけ
っこう高くつくので、ハレの日のおたのしみにとつて
ある。秋が深まり冬が近づくころ合いこそ、色と光の
スカイ・シヨウのシーズンなのだ。

幸いにも、わが家は調布飛行場にごく近い。一本道
を自転車で十五分とかからない。成田や羽田とちがっ
て、ここは自転車で乗りつけることができるのだ。

飛行機は「アイランダー号」といって、イギリス製

った。昔の船乗りたちは精魂こめて空を見つめていた。
読みまちがうと、生死にかかわった。大切な行事や用
向きをかかえた人は、のべつ空を見上げて一喜一憂し
た。予期せぬ雲の出現に舌打ちしたこともある。

幼い者たちにも遠足や運動会の前日は、大空が気にな
った。ハナたらしでも、どのような雲が意地悪な使
者であるか、おぼろげながら知っていた。それなりに
空模様から情報を受けるすべをこころえていた。

気象庁がとって代わって、もはや誰も上空を見つめ
ない。お天気おねえさんが、したり顔しておしゃべり

時速二五〇キロ、定員九名。胴と尾翼に青い線が入っ
ていて、カッコいい。プロペラが廻り出すと、機体が
ふるえる。短距離走者がスタートする前の胴ぶるいと
いうものだ。滑走路を走り出し、つづいてヒラリと舞
い上がった。空を飛ぶというよりも、地表が下に引き
込まれていく感じである。すぐに左に旋回。足下にわ
が町が見えている。赤いセーターの女性が物干し台で
洗濯物を干している。

とみるまに横浜市の上空を通過。右に江ノ島、三浦
半島の向こうに、青い海が鏡のように光っている。

伊豆諸島へは東京・竹芝棧橋から東海汽船が出てい
る。伊豆の下田からも船便がある。ただ、いまも述べ
たように、こちらは飛行場が庭先のように近いのだ。
大島行、新島行、神津島行と三コースがあつて、好き
なを選べる。

ただ、せっかく大空劇場の口の中にきたというのに、
正直なところ、見廻すのは少し怖い。機体が小さいせ
いか、全身が虚空に投げ出されているような気がして
ならない。プロペラの音がゴーからガーに変化すると、
ギクリとする。何か不調のしるしではあるまいか。す
ぐ前がパイロット席で、いろんな計器に明かりがつい